

マルチモーダル・テキストとしての絵本 —言語テキストと絵画テキストの関係性と類比性—

野村 眞木夫*

(平成21年9月29日受付；平成21年11月2日受理)

要 旨

本稿は、絵本をマルチモーダル・テキストとしてとらえ、これを構成する言語テキストと絵画テキストの関係性と類比性を具体的に記述し、概念化する方法を探るものである。この過程で、テキストとテキスト言語学の概念の拡張をはかり、画面・場面の概念を規定し、テキストを観察するレベルを設定する。本稿で提案した理論的な枠組みを実例に適用することで、その有効性を検討した。

KEY WORDS

絵本	Picturebook	マルチモダリティ	Multimodality
言語テキスト	Linguistic Text	絵画テキスト	Pictorial Text
関係性	Relationship	類比性	Analogy
画面	Page / Spread	場面	Scene

1. 本稿の目的および問題提起

本稿は、絵本（picturebook）を一つのジャンルを構成するテキストとして認め、その表現がどのように概念化され、テキストとしてどのように内的な相互に依存する関係性を維持し、テキストを構成する言語と絵画の諸要因がどのように類比化されるのかを探ることを目的とする。このとき、テキストの概念は、狭義の言語表現を意味するのではなく、人による広義の表現行為の所産としてとらえなおす必要が生じる。テキストとして受容される絵本は、複合的な性質を帯びており、したがって本質的にマルチモダリティの性質を内在していることによって、テキスト言語学の枠組みを拡張する一つの基準をなすものだと言ってよい。以下、本稿ではそのような枠組みやテキストを記述する方法を提案することにより、上記の諸問題を理論的に整理する。

2. テキストとしての絵本

本稿で対象とする絵本を、明示的にある範囲の出版物として限定することには困難がともなう。以下、主な先行研究をとりあげながら、このことを検討する。

松本猛（1982：16）は、絵本と隣接するジャンルとして、「さし絵の入った本」「マンガ」「画集」をあげ、その三者と等しく交差する領域に絵本を位置づける。以下、絵と文の関係や書物としての絵本の構造を、絵本の要素としての「画面」を中核として明らかにし、画面間・画面内・絵と言葉のモンタージュを絵本においてイメージを作り出す方法として認定する（同：第IV章4節）。絵本の特性は明らかにされているものの、そのジャンルとしての特性は無限定に開放されていると言ってよい。

Doonan（1993：9）は、絵本の絵を中核としてとりあげながら、読者（reader）に言及している。彼女はまず、絵本の読者は、その好奇心を生じさせ満足させる対象を処理するものであることを確認する。その読者はテキストを「旅しながら」言葉を読む者であるのだが、しかしそれが絵本であるがゆえに、虚構の世界のイメージを読者が独自に作ることは求められておらず、したがって絵本の読者は語句の字義どおりの意味に関わる読み手ではない。絵本の読者は絵の観察者（beholder）であり、描かれたものを見、目に触れた配列に感動させられるのだ、と述べる。そうして、絵本は対象と語句とイメージが複合的なテキストに結合されたものであり、読者の心の中にしか存在しないと主張する。

このような主張は問題提起としてすぐれた側面をもつ。すなわち、絵本が言語表現と絵画表現との複合したテキストであり、それが統一的に観察される必要のあることを述べているとみなすことができるのである。しかし、絵本を

ジャンルとして規定するだけの概念化をとまなっているのではない。

笹本純 (2001) は、二つのタイプ、物語絵本と創作絵本とを認定し、「絵と言葉のコラボレーション」を指摘する。特に「画面展開による語り」を認定し、「絵本を構成する単位は画面」であるとするのは、妥当な認識だと考えられる。この認識が、先の松本のとりあげた「さし絵の入った本」「マンガ」「画集」と絵本とを識別する要因の一つになりえよう。

このことは、藤本朝巳 (2007: ii ~ iii) による「絵本は連続する絵 (ページ) で構成され、続く絵と語りで情報を伝達する」、「絵本の語り」は連続するページで表現されて」という主張とも整合する。

もとより、絵本のすべてが絵と語りの二つの属性を均質に備えているわけではない。たとえば、Nikolajeva and Scott (2001: 11f) は、ワード (WORD) とイメージ (IMAGE) の二つの範疇を両極とするスペクトルに各種の出版物を配置する。要するに、「絵のないテキスト」と「言葉のない絵本」とをその両端に位置づける、ということである。言葉を伴う絵本をスペクトルの中央に位置づけながら、絵と言葉が相補的に働く絵本から、言語表現を欠く絵本までが認められている。ただし、このことは上記の諸研究における絵本の認定と矛盾するものではない。読者 (viewer) がページをめくり、次に生じることがらを見ようと促すはたらきは、ページターナー (pageturner) と呼ばれ、特にワードとイメージがシンメトリックに働く絵本では言語的な側面がこれにならているが、視覚的な側面と言語的な側面とが冗長になる可能性が指摘されている (Nikolajeva and Scott 2001: 152)。このことは、読者のページをめくるという行為が、ワードとイメージによって構成される個々の場面 (scene) の概念化によって促される効果によるものであり、この意味でページと場面の範疇を区別する必要が生じてくる。

以上のように、絵本の概念規定と観察の方法は、Nikolajeva and Scott (2001) の示したワードとイメージの間のスペクトルに対応するように、絵に重きをおく立場と、言語表現や語りに重きをおくたちばとが認められる。しかし、「画面」あるいは「場面」の概念が明示的な差異をとまなつて用いられているとは言い難い状況にある。

絵本の観察や分析をワードとイメージのどちらに重点をおいてとらえるかは、これを行う主体の指向性に依存するおもむきがあり、研究方法の適否の問題ではない。ただ、Nikolajeva and Scott (2001) の認めたように、既に絵本そのものの特性がワードとイメージとのバランスによって相対的に区分されることは事実である。

書籍の本文、つまり表紙・見返し・目次等を除いた部分が、ワードすなわち言語表現のみによって構成され、イメージすなわち絵画や図像による表現の要因を内在しない印刷物は、絵本としての機能を有しないので、本稿でとりあげる対象とみなさない。書籍の本文がワードとイメージとによって構成されているばあいは、絵本と認められる可能性を有する。しかし、これだけでは、松本猛 (1982) のあげる「さし絵の入った本」「マンガ」「画集」と絵本とを区分し、絵本を明示的に特徴づける基準にはならない。

そこで、まず「画面」と「場面」という用語を概念上明確に規定することで、絵本の特徴となる基準を取りだすこととする。

先ず「画面」であるが、本稿では書籍の本体の1ページ (page) または2ページ見開き (doublespread) を指すこととする。そうして、この画面に1個または複数の「場面」 (scene) が含まれるものとする。場面とは、その絵または言語によって表現される主体、対象、時間、場所にまとまりがあり、任意の場面と隣接する前後の場面との間に、なんらかの一貫性 (coherence) が認められることが条件になる。つまり、場面の間には継起性や概念的な連続性の関係があるということである。言語テキストと絵画テキストは、それぞれが独立して画面を構成しうる。絵本の「場面」はサイズとして「画面」と一致するばあいが多いと思われるが、一致しないとしても一つの場面が見開きの画面を逸脱する事例は、通常の形態では認めにくい。そのような構成を試みたとしても、その書籍が一般的な造本であれば、ページをめくる (page opening) という行為に制約されるため、画面の独立性は認めないと思われる。

先にあげたように、笹本純 (2001) は「画面」を絵本の単位としている。本稿で規定した「画面」も単位ではあるが、これは書籍の1ページまたは見開きを単位体として絵本をとらえる表層的な概念とみなし、絵本の内容に言及するときには「場面」という単位体が問われるのである。さし絵入りの書籍では、このような特徴が欠けている。また、画集において一貫性は、例えば画家や年代や絵画の主題・素材 (モチーフ) 等であり、絵本の多くが備えている一貫性とは質的な違いを認めることができる。

絵本とマンガの差異には、笹本 (2001: 106f) が言及している。そこでは、両者の絵の産出方法と伝達手段としての役割がとりあげられ、どの程度それらが自覚的に選択され、際立たせているかに帰着されており、境界条件は相対化されている。本節で注目しているワードとイメージ、および「画面」と「場面」の概念によっても、一般的に、また相対的にしか区分しにくい。マンガ、特にコミックスは、一定の登場人物の行為をワードとイメージにより時間軸に沿って表現するテキストとして、いわゆる物語絵本に近似する。ただ、ワードとしては登場人物の発話が中核を占め、吹き出し (balloon) によって表現する例が一般的であり、コマ割りによる画面の分割が絵本よりも高度に実行

されていることなどが、絵本との境界条件として認められよう。

以上、本節では絵本が絵画表現と言語表現の複合したテキストであることを確認したうえで、ワードとイメージのスペクトル上に位置づけられる絵本について、「画面」と「場面」の概念を明示することにより、隣接する「さし絵のあった本」「マンガ」「画集」等のジャンルとの境界条件を設定した。

3. テキストの概念とテキストを観察するレベル

3.1 テキストの概念の拡張

前節で先行研究を参照しながら確かめたように、任意の絵本がワードとイメージのスペクトル上に置かれるものとして、本節では、言語と絵画という異なる表現手段がどのように働くのかを具体的に観察し、テキスト言語学を拡張しながら、絵本のテキストとしての特性を検討する。

Lim (2004) は、体系機能言語学の観点から、言語と絵画の両者を記号的な資源とした用法に関係するページまたはフレームを分析するためのメタ・モデルとして、「統合的マルチ記号モデル (Integrative Multi-Semiotic Model (IMM))」を提案する。彼の論文では印刷されたテキストのみが対象となっていて、具体例として記述されるのは絵本である。

IMMは、図式的に表現されている。モデルは、上から表現面 (Expression Plane) と内容面 (Content Plane)、文脈面 (Context Plane) の三層からなる。表現面は言語のためのタイポグラフィと視覚イメージのためのグラフィックスで構成される。この表現面がテキストと読者 (reader) のインターフェースと見なされている。内容面は、言語の側面として語彙文法と談話意味論の二つ、視覚イメージの側面として視覚 (Visual) 文法と談話意味論の二つで構成される。以上の表現面と内容面の層では、言語と視覚イメージの側面が分離されているわけで、その分離された二つの部分を統合空間 (Space of Integration) が結びつけている。この二つの層と統合空間の三者を支えるのが文脈面であり、これはレジスターとジャンル、アイデオロギーの三つからなる。特に文脈の範疇について、記号的モダリティが相互に共文脈化 (co-contextualization) と再文脈化 (re-contextualization) をはたすことが指摘されている。

このLim (2004) のモデルは、絵本を典型とするテキストを観察するために有効な枠組みを提供している。体系機能言語学の観点によるものなので、テキスト言語学との関連が高く、また前節で依拠してきたワードとイメージの区分とも整合性が高い。ただ、従来のテキスト言語学は、それ自体が言語表現のみを対象としていたため、上記のようなモデルとの整合性を確保するためには、テキストまたはテキスト言語学の概念を拡張することが求められよう。

その拡張は、組織化された一つのテキストとして、言語と絵画という二つの表現のモードを体系的に観察することが有効になるような方向である。

まず、テキストの概念であるが、野村真木夫 (2000: 1f) では「テキストとは、人のおこなう言語活動において、あるまとまりをもった表現の具体相」をさしていた。この規定では、対象としてのテキストが、文字言語または音声言語のいずれであれ、言語表現に限定されることになる。すなわちスペクトルのワードの側である。そこでイメージをも内包するようにテキストの概念を拡張する必要が生じる。

「テキストとは、人の行う表現活動において産出される、あるまとまりをもった具体相である」という一般的な規定を行うことで、本稿で観察の対象とする人の表現の所産は、言語表現のみならず絵画をふくみ、さらに映画、舞踊、建築、都市景観なども想定できるはずである。これは、その表現の段階で人が関与することを前提にしており、したがって広義の記号の概念に回収されることはない。また、「まとまり」のあることを条件としているため、仮に都市景観をとりあげるとしても、無限定な景観の集合ではなく、なんらかの計画性に沿った部分を観察の対象とすることになる。そこにまとまりや一貫性を見いだしにくいとすれば、着目した対象がそのような表現の過程を経なかったか、あるいはまとまりの規模が観察者の想定と異なっていることを意味するであろう。

テキストの概念をこのように拡張すると、テキスト言語学は、それらテキストに認められる意味、まとまりの仕組みとしての内的・外的な関係性、機能、構造を観察の対象とし、それらを記述したり、そこから規則を導く分野として認定できる。この段階でのテキスト言語学は、現実に対象とする表現手段、すなわち表現のモードがどのようなかに応じて、記述や分析の方法、あるいは対象を観察しデータを収集する手段が規定されることになる。

さて、テキストの概念を狭義の言語表現から拡張する方針は、メイナード (2008) の「マルチジャンル談話論」の提案に近い。メイナード (2008: 2) は、ジャンルを「意味を創造する人間行為に典型的に観察できる一定の表現様式によって支えられたある種の談話のタイプ」とし、表現様式とは、言語表現のパターンやスタイル、さらにビジュアル記号をも含む、という。

このような発想にたつ方法論的な原理として、マルチモーダルあるいはマルチモダリティの概念がある。この周辺の動向はメイナード（2008）が詳細に報告しているので、ここでは基本的な考え方を確認するとどめる。

マルチモダリティについて、Kress and van Leeuwen（2001：20ff）は、記号的な産出物または出来事のデザインにおける種々の記号的なモードの使用、ならびにこれらのモードが結合される方途だと定義する。モードとは、談話の同時的な実現を許容する記号的な資源や（相互）行為のタイプだとされる。ただし、彼らの言う談話とはリアリティ（の諸相）についての社会的に位置づけられた知識の形式であり、狭義の音声言語の資料とは異なる。それゆえ絵本もマルチモダリティの所産とみなすことができる。

問題は方法論であるが、彼らは、マルチモーダル・コミュニケーションの背後には共通の原理があるという。共通の記号的な原理が異なったモードに、あるいは異なったモードを横断して、作用するという観点にたつ。そこで、談話・デザイン・プロダクション・ディストリビューションという四つの概念を規定して、任意のマルチモーダル・テキストを検討している。このような方針は、多様なモードによる表現が一つのテキストに実現されたものとして認識しようとするとき求められる考え方であるが、具体的なテキストの記述においては、術語の規定そのものに困難が予測されるところでもある。

本節では、複数の手段で表現されたテキストをとりあげるとき、テキストの概念を拡張する必要があること、絵本がマルチモーダル・テキストの一種と認められることを確認した。

3.2 テキストを観察するためのレベルの設定

本節では、「テキスト」の概念規定の拡張と同様、（マルチモーダル）テキストを観察する枠組みを拡張する。野村（2000：112）では言語テキストの関係性を取りだすにあたり、三つのレベルを想定した。それは、Hodge and Kress（1988：263）による(1)の記号論の立場からの規定を言語テキストに適用した(2)である。(1)は対象のサイズにのみ依存しているが、(2)は言語的な範疇を参照して規定するものであり、サイズに依存するところはない。

- (1) a. マイクロ構造：容易に知覚できないほど小さな構造
- b. メゾ構造：直接調べることができるような尺度の構造
- c. マクロ構造：空間的または時間的に直接知覚するには困難なほど大きな構造（Hodge and Kress 1988：263）
- (2) a. マイクロのレベル：形式的な特徴や語の意味、統語論の範疇を指標として、発話や文相互の関係性を規定する。
- b. メゾのレベル：発話や文の意味・機能あるいは表現類型の範疇を指標としてテキストおよび部分テキストのまとまりの組織を規定する。
- c. マクロのレベル：テキストおよび部分テキストの組織や類型性を指標としてテキストを文化的・社会的あるいは制度的に規定する。（野村 2000：112）

さて、(2)は言語表現のモード（言語テキスト）にのみ関与するレベルの設定である。これを一般化して、マルチモーダル・テキストのレベルに敷衍する必要がある。言語表現の範疇に直接関与するのは、(2a)と(2b)である。この二つから言語表現の制約を除去すると、(3)のように書き換えられる。言語的な範疇を指標として参照するのではなく、人の表現活動によって産出された具体相を指標とするのである。

- (3) a. マイクロのレベル：形式的な特徴や範疇を指標として、表現の部分や要素の関係性を規定する。
- b. メゾのレベル：表現の部分や要素の範疇、関係性の類型を指標として、テキストおよび部分テキストのまとまりの組織を規定する。
- c. マクロのレベル：テキストおよび部分テキストの組織や類型性を指標としてテキストを文化的・社会的あるいは制度的に規定する。

個々のマルチモーダル・テキストを記述・観察しようとするとき、そのテキストを構成している要因に、例えば明示的に言語表現があるとすれば、これを言語学の範疇によって記述することは当然であり、そうした方法を採用するのが現実的である。しかし、これが他のモードの要因と複合して、一つのマルチモーダル・テキストを構成していると認識するとき、単にモノモーダルのテキストの集合体として記述するのではなく、各モードが独立して作動しつつ、同時に各モードが相互に並列して関係すると理解する。人の表現活動の所産を一般的に対象とし、テキストを観察するレベルを(3)のように規定することで、記述や整理を明確に実行しようとするのである。以下の節では、この

ことの有効性を確認しながら議論をすすめる。

3.3 テキストにおける関係性と類比性

いま指摘した現実的な方法において、特にマイクロのレベルにおいて言語学の範疇が有効である例をとりあげ、言語テキストと絵画テキストの関係性と類比化の問題を検討しよう。

テキストは、五味太郎の絵本(a)『さる・るるる』(1979絵本館)と(b)『いっぽんばし わたる』(1979同)である。

(a)『さる・るるる』はB6判の縦長、扉を含めて24ページ、平仮名・横書きである。ここでは、扉を含めた本文のみを記述の対象とする。まず扉にはタイトル・著者名等が記載され、ベッドから起き上がったサル絵がある。以下、本文であるが、22～23ページが見開き1画面に3場面、左ページの24ページが1ページで1画面・1場面である。他は、見開きで1画面・1場面、枠は曲線的なair frameである。文字の配置は、各場面の絵のデザインとの関係で選択されている。言語テキストは、第1場面の「さる・くる」をはじめ、「さる・X」のように「さる」の後に中黒をおき、その後に動詞がある。

(b)『いっぽんばし わたる』も判型とページ数、平仮名・横書きであることは(a)と同じだが、判が横長である点異なる。扉にはタイトル・著者名等が記載され、青地の扉の下方に白の横棒が描かれていて、これが「いっぽんばし」であることが予測できる。各画面は、最終画面左ページの24ページ(最終の第12場面)が言語表現を欠いた絵のみであることを除き、見開き2ページ1画面、左ページが言語表現、右ページが絵である。言語表現は、「びよん びよん わたる」「ならんで わたる」のように、オノマトペを含む何らかの修飾語句などがあり、その後に動詞「わたる」がある。ただし、第11場面の動詞のみ「おちる」である。語句はフレーズ単位で分かち書きされている。枠はない。

言語テキストは、(b)の修飾語句をすべて一語とみなすならば、2冊ともに二語発話で記述されていることになる。さらに、この二語発話をBraine(1963)が幼児言語にそくして提案した軸構造(pivotal construction)の古典的なモデルに対応させるならば、(a)の言語表現は、すべて[軸クラスー開放クラス]またはPXの構造により、(b)は、最後の2場面を除いて、[開放クラスー軸クラス]またはXPの構造によって記述されていると言える。これは、マイクロのレベルでの記述である。この表現が一つのテキストとして一貫性を維持し、まとまりをなしているのである。

2冊のテキストをそれぞれ組織している言語テキストと絵画テキストとの二つのモードの関係であるが、それはつぎのようにとらえられる。

まず、(a)では、動詞のいかんにかかわらずサル(以下読みやすさのためカタカナ表記とする)が動作主格である。動詞は、結合価1の「くる」(来る)等から結合価2「みる」(見る)等、結合価3「うる」(売る)等までが認められる。言語テキストは二語発話であるため、結合価2および結合価3の場面は、言語テキストのみでは格成分の一部が欠けていることになる。これを補うのが、絵画テキストである。

たとえば、第1場面は、サルが左から右に向かって歩いてくる全身像が、見開き画面の左側下方に描写されているだけであるが、「くる」が結合価1の自動詞であるので情報に欠損は生じていない。

第2場面の「みる」は結合価2の他動詞であるため、言語テキストだけでは情報に不足がある。これを絵画テキストが補充し、右ページでサルが結実した果樹を見上げる様子が描写され、「みる」の対象格が確定される。言語テキストと絵画テキストの関係性が、相補的に情報を完備させるのである。テキストの受け手は、言語表現と絵画表現を同時に観察し、関係づけることで、それぞれから観察した情報を類比化して場面の概念化を完全なものとして行うことができる。第1場面と第2場面は、時間軸に沿った継起的な展開である。以下、連続する場面間にも時間軸が認められ、サルも空間軸を移動する、物語のタイプの絵本である。

結合価3では、第5場面の「うる」のばあい、サルが第3場面から第4場面に掛けて獲得した果実(対象格)を、シカ(相手格)に「10えん」で販売した様子が絵画表現によって描写される。(a)では、以上のように言語テキストと絵画テキストとが複合したマルチモーダルのテキストを構成しているわけだが、その複合性において、一貫して二語発話で記述された言語表現の情報の欠損、つまり動詞を軸クラスとする二語発話では、結合価2以上の文を、格成分の省略なしで表現しえないことを補填すべく、二つのモードが作動している。要するに、絵本のテキストの各場面は、テキストの受け手が言語テキストと絵画テキストとの間に関係性を導入し、類比化させて意味を産出する作業領域(working area)なのである(野村2000:57, 195)。

時間軸に沿って状況の推移する様相や空間軸に沿ってサルが移動したり行動したりする様相、場面相互の関係性に基づくまとまりかた等には、複数の場面の関係性を対象とするメゾのレベルでの観察が要求される。

(b)のばあい、「わたる」は結合価2の動詞であり、第10場面以降を除いて、これが軸クラスになっている。「わたる」の経由格は、言語表現のモードに限定しても、絵本のタイトルから「いっぽんばし」であることが明白であるため言語化されていないが、このことが受け手が文の意味を概念化する作業を妨げる要因にはなりにくい。

問題は動作主格である。言語テキストには「わたる」の様態が副詞的な修飾語句による開放クラスとして表されているだけであり、動作主格は欠けている。これを補填するのが絵画表現のモードである。このモードでは「いっぽんばし」が白い横棒として表現されているが、さらに各場面において、左から右に向かって、たとえば第1場面の「ぴょん ぴょん わたる」ではウサギが橋の上で跳ねている様が描写される。以下、類似の展開で、言語テキストと絵画テキストの関係性は比較的単純であり、絵画テキストから動作主と経由格が明示されるので、言語テキストと絵画テキストとを類比化し、一つのテキストとして構築する作業は容易である。受け手にとって、次の場面への予測もつきやすく構成されている。

第10場面の言語テキストは「げんきに わたる」、絵画テキストでは少年が動作主格として橋の上を走っている様が描写されている。ここまでは明示的な時間軸がみとめられず、また空間軸についてもその推移はない。橋を渡る少年をふくめた動物の様態を、言わば定点観測しているわけであるが、第10場面以下、三つの場面にかけて時間軸が導入されている。すなわち、第11場面の絵画テキストで、少年が足を踏み外す様子が描写され、言語テキストは「げんきに おちる」のような矛盾語法によって表現される。ここで軸クラスと開放クラスとが入れ替わる。最後の第12場面は、画面が1ページで、少年が水面から呆然とした表情で顔を出している絵画テキストのみである。テキスト末尾の3場面間の言語テキストと絵画テキストの両者の連続する関係に変化を与え、それまでの類似した場面の連続で構築された受け手の予測がマイナスの方向で妨げられることにより、アイロニカルなユーモアが醸し出されている。

以上のように、言語表現が簡潔であり、絵画表現が単純化されている絵本では、二つのモードの対応関係に大きな齟齬や情報の顕著な過不足は認められない。とはいえ、両者が一対一で対応するのではなく、受け手による概念化を相補的に満たすように作動している。つまり、二つのモードの関係性が明確であるとき、両者を類比化することでテキスト全体の概念化が有効に行われるのである。

4. 物語絵本の観察と記述

前節では、言語表現・絵画表現ともに簡潔な例を、マイクロのレベルを中核としてとりあげた。前節で対象とした絵本はともに時間軸が導入されているので、部分的にであれ物語としてのタイプを割り当てることができるテキストである。しかし、一般に「物語絵本」として分類されるテキストは、「物語やその他の言葉による表現がまず先行しており、後から絵が、言葉で表された内容を眼に見えるように描き出すという仕方で作られるもの」(笹本2001: 73)を指す。本節では、その一例をとりあげ、主にメゾのレベルでの観察と記述を検討する。

テキストは新美南吉の『手袋を買ひに』を原作とする絵本である。本稿では、次の2冊を対象とする。著作者名とタイトルの表記は、それぞれの奥付にしたがう。

(c) 文／新美南吉、絵／わかやまけん『てぶくろをかいに』(1970ポプラ社) 245×215mm、扉と奥付を含めて32ページ。

(d) 作・新美南吉、絵・黒井 健『手ぶくろを買ひに』(1988偕成社) 285×245mm、扉と奥付を含めて32ページ。

本文は、ともに縦書きで30ページ、新字・新仮名によっている。児童書としてルビが加えられ、特に(c)では漢字の使用率が低く、そのために分かち書きが行われている。底本について、(c)のポプラ社版は書誌情報を欠くが、異聖歌・滑川道夫編『新美南吉全集 第1巻』(牧書店)の本文に近似している。しかし、表記は大幅に異なり、一部、字句や符号も対応しない。(d)は『校定新美南吉全集』(大日本図書)を底本としたことが明記されていて、漢字の使用率が高い。ただし、改行箇所は、底本と一致しない部分がある。

さて、両者は本文のページ数が同一で、判型にも極端な差はない。見開き1画面が1場面を構成している点も共通する。画面の絵と文字の配置方法には相違があり、(c)ポプラ社版は画面に枠がなく、文字は絵の背景部分や余白に重ねて印刷されており、文字の印刷位置は統一されていない。(d)偕成社版は、文字、絵画ともに枠で区分されている。文字部分の枠は細く淡いdrawn frameで、常に右ページにあり、しばしば枠の横幅が1ページに満たない。このばあい、左ページの絵画の枠が、右ページのスペースに拡大される。絵画の枠はair frameである。

4.1 一画面内の関係性と類比性

まず、画面に記載された言語表現として、同一の部分テキストが選択された画面を観察する。15画面中、言語テキストの引用部分が一致しているのは6画面であり、次の(4)がその一つである。【表1】の左枠に『校定新美南吉全集』により原文をあげる。全角下りの改行部分に□を示す。(c)と(d)の原文との異動は、ここでは問わない。

この部分テキストに対応する絵画表現は、当然のことながら(c)と(d)とで異なっている。言語テキストに見いだされる語句を抜き出し、またはそれを生かしながら、絵画のモードに選択された素材(モチーフ)を【表1】の右の二つの枠に列挙してみよう。語句の抜き出しだけで記述しにくいときは、[] 内に簡単な説明を記入する。また、言語表現として、該当する部分テキストに見いだされない素材は() 内に記入して示す。

【表1】 (c)の第2場面と(d)の第3場面

『手袋を買ひに』原文	(c)わかやまけん (第2場面)	(d)黒井健 (第3場面)
(4)□子供の狐は遊びに行きました。眞綿のやうに柔かい雪の上を駆け廻ると、雪の粉が、しぶきのやうに飛び散つて小さい虹がすつと映るのです。 □すると突然、うしろで、 「どたどた、ざーつ」と物凄い音がして、パン粉のやうな粉雪が、ふわ一つと子狐におつかぶさつて来ました。子狐はびつくりして、雪の中にくるがやうにして十米も向かふへ逃げました。何だらうと思つてふり返つて見ましたが何もゐませんでした。それは樅の枝から雪がなだれ落ちたのです。まだ枝と枝の間から白い絹絲のやうに雪がこぼれてゐました。	子供の狐 [ふり返りながら右方向へ進行, フル] 雪 [雪原] しぶきのやうに飛び散る雪の粉 [または「パン粉のやうな粉雪」, 「白い絹絲のやうにこぼれてゐる雪」] 小さい虹 (青空)	子供の狐 [ふり返りながら左方向へ進行, ロング] 雪 [雪原] 樅の枝から白い絹絲のやうにこぼれてゐる雪 (青空) (樅の森林)

(c)と(d)とでは、(4)の言語テキストから絵画のモードとして選択された部分が、【表1】に示すように異なる。

(c)の言語テキストは「おつかぶさつて来ました」までが右ページ右側、「子狐はびつくりして」以降が左ページ左側に置かれている。絵画テキストでは、場面のほぼ中央に虹と子狐が描かれていることから、「雪の粉が、しぶきのやうに飛び散つて小さい虹がすつと映るのです」の部分が選択されていることになる。しかし、子狐は「ふり返る動作をしており、また子狐の上方が白くまた一部縦方向にその白色が引かれているので、「何だらうと思つてふり返つて見ました」、および「パン粉のやうな粉雪が、ふわ一つと子狐におつかぶさつて来ました」や「まだ枝と枝の間から白い絹絲のやうに雪がこぼれてゐました」の部分が選択されているとも理解される。あるいは、言語テキスト

(4)の全体、つまりある時間経過の全体から代表的な素材を選択し、一場面に描写したとみなすことも可能である。視線の位置は、子狐の目とはほぼ同じ高さに定められている。

(d)の絵画テキストは虹の描写を欠く。「まだ枝と枝の間から白い絹絲のやうに雪がこぼれてゐました」に相当する描写が場面中央にあり、子狐は場面左端から1/4の位置でそのこぼれる雪を「ふり返つて」いる局面におかれているので、言語テキスト(4)の後半が場面として選択されたものとして類比化される。したがって、場面に認められる時間的な経過は、(c)と異なり短く特定される。絵画テキスト全体はやや俯瞰的なパノラマとして構成されていて、言語表現に明記されていない樅の森林が描かれている。雪原の傾斜と樅の木の影、森林の曲線的な遠近法と濃淡の効果によって、奥行きが表現されている。子狐は、雪原と森林のパノラマの画面において、点景とも言うべき関係性を産出している。

以上のように、同一の言語表現(4)に関係する画面であっても、絵画表現の場面として選択される部分は、多様でありうる。また、言語テキストから絵画テキストを構成する作業は、単なる解釈、つまり言語テキストに外延的な意味を割り当てる作業ではない。テキストとして何を選択しまたは捨象するか、言語表現に物語としての時間的な経過が認められるならば、そこからどの局面または範囲を選択するか、その局面や範囲において絵画表現の素材としてどの対象を選択しまたは捨象するか、選択した対象の相互関係をどのように構築するか、などの決定が求められる。これは言語テキストの概念化を経た、絵本として調和する絵画テキストの新たな構築である。絵本は、こうして言語テキストと絵画テキストを複合的に組織した一つのテキストとみなされるのである。

4.2 画面連続における関係性と類比性

次に、言語表現の同一の範囲を、3画面に分割して絵画表現に対応させている部分を取りあげる。言語表現は、

【表2】の左枠に示す部分テキスト(5)である。場面としては両者ともに第8場面から第10場面であるが、その部分テキストのまとまりとしてのパラグラフの切り取りかたが、(c)と(d)とで異なり、ずれが生じている。形式段落についても、原文と一部ことになっていて、(d)の第9場面の開始にあたる第4文「やがて……」は、原文の改行箇所ではない。絵画テキストとしてのまとまりを優先していることが推定される。

この様相を、【表1】と同じ要領で、表の右の二つの枠に示す。ただし、表の右の二つの枠に引いた実線は3場面の区分であり、その延長にあたる部分を原文の枠に破線で示した。また他の場面の言語テキストに見いだされる語句が対応するばあいは、その左上に*を付した。

【表2】 (c)と(d)の第8場面から第10場面

『手袋を買ひに』原文	(c)わかやまけん (第8場面～第10場面)	(d)黒井健 (第8場面～第10場面)
(5)□子供の狐は、町の灯を目あてに、雪あかりの野原をよちよちやつて行きました。始めのうちは一つきりだった灯が二つになり三つになり、はては十にもふえました。狐の子供はそれを見て、灯には、星と同じやうに、赤いのや黄いのや青いのあるんだなと思ひました。	子供の狐 [アップ・左向き横顔・二足歩行] 雪あかりの野原、町の灯[遠景] (町の家々 [切妻屋根のみ] [遠景]) (町の中の林)	子供の狐 [ロング・後ろ向き] 雪あかりの野原、町の灯 [遠景] (町の家々 [切妻・寄棟・陸屋根・ドーム含む] [煙突から煙] [遠景]) (町の中の林) (降雪) (灌木) (草) (電柱)
やがて町にはいりましたが通りの家々はもうみんな戸を閉めてしまつて、高い窓から暖かさうな光が、道の雪の上に落ちてゐるばかりでした。		狐の子 [ロング・左斜め前向き] 通りの家々 [煙突から煙] 高い窓・道の雪の上に落ちている暖かさうな光 自転車の看板・眼鏡の看板・その他いろんな看板 [(鮮魚店の看板・靴店の看板)], (鮮魚店のトロ箱) 小さな電燈 (降雪) (樹木) (電柱・街灯) (家屋の外壁 [場面右端近景])
□けれど表の看板の上には大い小さな電燈がともつておましたので、狐の子は、それを見ながら、帽子屋を探して行きました。自転車の看板や、眼鏡の看板やその他いろんな看板が、あるものは、新しいペンキで画かれ、或るものは、古い壁のやうにはげてゐましたが、町に始めて出て来た子狐にはそれらのものがいつたい何であるか分らないのでした。	狐の子 [フル・左向き・二足歩行] *通りの家々 自転車の看板・眼鏡の看板 黒い大きなシルクハットの帽子の看板・帽子屋	子狐 [まちがつた方の手をすきまからさしこむ] [ロング・右斜め後ろ向き・二足歩行] 黒い大きなシルクハットの帽子の看板 青い電燈 帽子屋・*高い窓[*暖かさうな光] 戸が一寸ほど開いて光の帯が道の白い雪の上に長く伸びた様子 (タイル店の看板) (降雪)
□たうとう帽子屋がみつかりました。お母さんが道々よく教へてくれた、黒い大きなシルクハットの帽子の看板が、青い電燈に照されてかかつてゐました。		
□子狐は教へられた通り、トントンと戸を叩きました。 「今晚は。」 □すると、中では何かこと音が生じましたがやがて、戸が一寸ほどゴロリとあいて、光の帯が道の白い雪の上に長く伸びました。 □子狐はその光がまばゆかつたので、めんくらつて、まちがつた方の手を、——お母さまが出しちやいけないと言つてよく聞かせた方の手をすきまからさしこんでしまひました。	子狐 [まちがつた方の手をすきまからさしこむ] [フル・左斜め前向き・二足歩行] *帽子屋 戸が一寸ほど開いて光の帯が道の白い雪の上に長く伸びた様子	

原文の形式段落との対応であるが、(c)にこれとの食い違いは認められない。(d)は、先に述べたように「やがて」で開始される第4文で場面を転換し、さらに「たうとう」で開始される第7文でも転換している。この二つは事態の時間的な展開を表現する副詞である。(c)はこの位置での転換はない。(d)の場面、またはパラグラフのまとまりを認知する方法は、事態の時間的なまとまり方に依存する程度が高い。このために、原文では改行の設定されていない部分での場面転換が選択されたものと理解できる。

この意味においては、(c)の方が原文に密着した場面構成を選択しているといえよう。それは各場面に描写される素材(モチーフ)についても同様である。要するに、(c)の絵画テキストは、主に原文から直接選択したもので構成されていて、新たに創作された素材、つまり【表2】で()内に記入したものは限られており、これに対して(d)では原文には表現されておらず新たに創作された素材が少なくない、ということである。また、子狐が二足歩行または二足で静止する場面は、この部分以外においても(c)に多く見られ、その観点からの擬人化の程度(笹本2006)は(c)が高い。これらのことが言語と絵画の二つのモードを一つのテキストとして複合化した絵本の受け手による概念

化を、相当程度制約することになる。

(c)のように言語テキストと絵画テキストを構成する素材に差異が少なければ、テキストの受け手は、素材に関する冗長性のなかで個々の素材の視覚的な情報を補填する作業を行う。

たとえば(c)の第8場面であれば、子狐の動作や表情、雪明かりの野原の状態、町の灯および町の景観、子狐の知覚や思考と景観の関連等が、言語テキストの前半と絵画テキストの間で端的に関係づけられる。子狐は右ページの大半を占める左向きのアップで描写されていて、眼がページ中央に位置している。この部分に卓立性(salience)

(Kress and van Leeuwen 2006, メイナード2008)が認められ、言語テキストの視覚表現「狐の子供はそれを見て」との高い関係性を想定できる。

他方(d)のように、言語テキストよりも絵画テキストの方に多くの素材が認められるのであれば、同じ第8場面の遠景であっても、さらに野原や町の景観、建物の種類の多様性が認められることから、町の文化的または社会的な状況にも推論を働かせることが可能になる。雪の深さや質感も推測することが可能な描写が選択されている。また、(c)と異なって子狐は野原の点景に等しく描かれているが、場面の中央に位置し、背後からの描写であるところから前方の町に視線が方向づけられていることが明らかである。このことと言語テキストの「やつて行きました」が表現する視線の方向をあわせると、子狐の進行方向に卓立性が与えられ、テキストの受け手は子狐と視線を共有することが容易になる。

第9場面の絵画テキストで、(c)と(d)の大局的なレイアウトは近似している。ともに、場面のほぼ中央に子狐を配置し、町の商店街の道路が右奥へ向かっていて、町並みの消失点は場面の右側外部の上方(c)、または場面の右側外部下から2/5の位置(d)である。特に(d)では場面の近景右端に家屋の外壁を配置してあり、消失点はその外壁の背後に入りこんでいる。(c)で隣り合った各商店のファサードにはズレが与えられていて、町並みがジグザグ状になっている。(d)は直線的である。町並みの描写には、選択された素材の多寡が認められる。(c)の素材は言語テキストから抜き出したもので構成されているが、(d)はここでも新たな素材を創作して、言語テキストから素材を抜き出す作業も詳細になっている。「暖かさうな光」や看板の新旧、商店の壁の質感なども相互に識別が可能であり、言語テキストの描写を視覚的に実体化する効果がある。

子狐の描写にはフル(c)とロング(d)の差がある。また(d)では、第8場面と第9場面の間で、絵画テキストの子狐の進行方向が変換されている。すなわち、第8場面では後ろ向きであった子狐が、第9場面では左手前に向かって移動するように描かれていて、第10場面への推移が自然に行われる効果をはたす。このことは、(d)の第9場面の言語テキストが「何であるか分からないのでした」で切り上げられていることとの関係性がたかい。

(c)では第9場面で言語テキストのみならず絵画テキストでも「帽子屋」が素材となっていて、子狐は近景の帽子屋の看板を見上げる姿勢になっている。つまり、「たうとう帽子屋がみつかりました」の「たうとう」は、それまでの時間的な展開の過程をへて最終的な事態への到達が完成したことを意味し、(c)ではこの最終的な局面で場面をとりまとめるのである。これに対し(d)では、すでに指摘したように子狐が帽子屋を見つける部分テキストは、第10場面で引用されている。以上のことから、第9場面の絵画テキストの卓立性は、(c)では「帽子屋がみつかりました」、(d)では「帽子屋を探して行きました」の部分とのたかい関係性が指摘できる。

第10場面でも絵画テキストの素材は、(c)(d)が近似している。どちらも子狐が「まちがつた方の手をすきまからさしこんで」しまう場面である。子狐にフルとロングの差があるのは前場面と同じである。(c)の絵画テキストは子狐の目と同じ高さで描かれ、(d)は俯瞰的に描かれているが、大きな差異は子狐の向きである。(c)では前の場面と連続的に左向きであるので、前場面からそのまま戸口に歩み寄る方向が選択されている。これに対し(d)で子狐は右向きに帽子屋の戸に対している。もとより帽子屋の描き方に違いがあり、(c)は前場面と同じ遠近法によっている。(d)では、帽子屋のファサードの向きが前場面の商店の向きと逆転し、街並みの消失点は画面の左側外部になる。それまで「帽子屋を探して行きました」という子狐は、「たうとう帽子屋がみつかり」「戸を叩く」局面で歩行を停止するのであるが、このことが絵画テキストに表現された方向性の変換によって明示されている。これは「たうとう」で開始される段落を、場面の最後におくか最初におくかの選択と相関していると考えられ、それぞれの言語テキストの場面としてのまとまりが、絵画テキストにおける方向性と類比化されるのである。

ここでとりあげた3場面をつうじて、(c)(d)ともに、絵画テキストで町の家や看板が描かれている。言語テキストを視覚化しているわけだが、家屋の様式や外壁の素材感、看板の種類やデザイン、街路の様子等から、それぞれが独自に想定している町の文化的、社会的な情報を、受け手は認知することができる。これはマクロレベルでの関係性の存在と類比化の作業によるものである。

これまでに記述してきた関係性は、そもそも言語と絵画の記号としてのモードに差異があるため、言語と絵画とが1対1の関係で処理されるのではなく、言語的な分節と絵画的(映像的)な分節とが、曖昧に関係し類比化されるの

である。この意味で、上に示した【表1】と【表2】の記述方法は便宜的なものと言わざるをえないだろう。

しかし、絵本(c)と(d)のテキストとしての特徴の差異をとりだす手段とはなりえていない。部分テキスト(5)は、既にとりあげた「やがて」「たうとう」のみならず「始めのうちは……はては」「すると」などが介在し、時間的な経過によって子狐の空間的な移動と目的の達成を表現する物語の部分である。その同じ物語について、移動と経過の変化のどの局面を一つの場面に組み込むか、さらにどの局面で場面を転換させるか。また、言語テキストから、その場面を端的に表す語句をどのように選択して絵画テキストの素材とするか、言語テキストに表現されていないけれども、われわれの知識を活用して推論可能な素材を配置するか。このような差異が、絵本(c)と(d)との間にみいだされ、言語テキストの語句と選択された絵画テキストの素材が相互に関係性を維持し、類比化されている。ここにマルチモーダル・テキストとしての絵本から受け手が意味を産出する作業領域が見いだされる。

5. おわりに

以上、本稿では、絵本をマルチモーダル・テキストとして観察するための理論的な枠組みと、これを記述する方法を具体例にそくして提案した。この過程で、絵本のマルチモダリティの実態を検討し、画面・場面の概念を識別した。そのうえで、これまでのテキストやテキスト言語学の体系を拡張し、言語テキストと絵画テキストがどのように関係し、類比化されるのか、特に同じ言語テキストを原文とする異なった絵本をとりあげて、その共通性と差異とを観察した。この作業は、言語テキストと絵画テキストの関係性を明示しながら、現象をマイクロ・メゾ・マクロの3レベルに区分して実行した。その結果、本稿で提案した方法が一定の有効性をもたらしことが認められた。

また、絵画テキストが言語テキストの単なる解釈の結果とみなしがたいことを主張した。解釈の結果とする認識は、マルチモーダルのありようをモノモーダルに還元したものであるが、テキストの送り手も受け手も、絵本の創作過程や受容過程においてテキストをモノモダリティの観点からとらえることは、現実的にできないと考えられる。

本稿では物語性を内在した絵本を中心に例示したが、言語テキストを欠きながら物語性や先行する言語・絵画テキストに言及する絵本（例えば安野光雅『旅の絵本』1977福音館書店）や、無声のアニメーションを絵本に作り替えて言語テキストを付加した例（加藤久仁生・平田研也『つみきのいえ』2008白泉社）等があり、絵本に限定してもテキストとしての性質は多様である。マルチモーダル・テキストを一般的にとらえるならば、本稿で拡張したテキストの概念に応じて種々のテキストが想定され、これを統一的に観察しようとするとき、Kress and van Leeuwen (2001) が主張するように共通の原理を想定し、共通の用語体系を導入することが望ましいのであるが、その実現にはいささかの猶予と留保が必要とされるであろう。個々のテキストのマルチモダリティの着実な記述と概念化を積み重ねることが当面の課題であり、本稿ではその一端を示した。

【参考文献】

- Braine, M. D. S. 1963 'The Ontogeny of English Phrase Structure: The First Phase.' *Language*, 39(1), 1-13.
- Doonan, J. 1993 *Looking at Pictures in Picture Books*. Thimble Press.
- 藤本朝巳 1999 『絵本はいかに描かれるか ―表現の秘密―』日本エディタースクール出版部
- 藤本朝巳 2007 『絵本のしくみを考える』日本エディタースクール出版部
- Hodge, R. and Kress, G. 1988 *Social Semiotics*. Polity Press.
- 石黒 圭 2008 『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房
- 伊藤 守 編 2006 『テレビニュースの社会学 ―マルチモダリティ分析の実践―』世界思想社
- 小山清男 1998 『遠近法 ―絵画の奥行きを読む―』朝日新聞社
- Kress, G. and van Leeuwen, T. 2001 *Multimodal Discourse*. Hodder Education.
- Kress, G. and van Leeuwen, T. 2006 *Reading Images: The Grammar of Visual Design (2nd ed.)*. Routledge.
- Lewis, D. 2001 *Reading Contemporary Picturebooks : Picturing Text*. Routledge.
- Lim F, V. 2004 'Developing an Integrative Multi-Semiotic Model.' in O'Halloran ed. 2004, 220-246.
- 松本 猛 1982 『絵本論：新しい芸術表現の可能性を求めて』岩崎書店
- メイナード, 泉子・K. 2008 『マルチジャンル談話論 ―間ジャンル性と意味の創造―』くろしお出版
- 中川素子, 今井良朗, 笹本 純 2001 『絵本の視覚表現 ―そのひろがりとはたらき―』日本エディタースクール出版部
- Nikolajeva, M. and Scott, C. 2001 *How Picturebooks Work*. Garland Publishing.
- 野村眞木夫 2000 『日本語のテキスト―関係・効果・様相―』ひつじ書房
- O'Halloran, K. L. ed. 2004 *Multimodal Discourse Analysis : Systemic-Functional Perspectives*. Continuum.
- 笹本 純 2001 「絵本の方法 ―絵本表現の仕組み―」中川素子, 今井良朗, 笹本 純 2001, 71-154.

笹本 純 2006 「宮沢賢治の童話を原作とする絵本におけるイメージの画像化 ―言語表現に基づく画像形成としての絵本制作の研究」『絵本学』8, 31-45.

付記：本稿の一部は上越教育大学学校教育学部言語系コース学生・畔上歩美さんとの討議に負う。

Picturebook as Multimodal Text

—Relationship and Analogy between Linguistic Text and Pictorial Text—

Makio NOMURA*

ABSTRACT

The purpose of this paper is to search for a methodological system of conceptualizing picturebooks, describing the relationship and the analogy between linguistic text and pictorial text of them. In this process, the domains of the text and the text linguistics are generalized, the concepts of page, spread and scene are defined, and the levels from which we observe the text are postulated. This theoretical system was applied to some picturebooks and the effectiveness of the proposed system was ascertained.

* Humanities and Social Studies Education